

しなやかに強く

奨励	堂腰 きみ子〔どうこし・きみこ〕
奨励者紹介	同志社幼稚園園長

わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力を身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れをたたえることができるように。

（フィリピの信徒への手紙 1章9－11節）

幼児期に大切なこと

おはようございます。今日は、このような立派なクラーク・チャペルで奨励させていただくことを感謝申し上げます。今日は「しなやかに強く」という命題でお話しさせていただきます。同志社の教学の理念として「良心を手腕に運用する人物」の育成を目的としています。そのなかで同志社が大切にしている「良心教育」、この良心教育が幼児期のなかでは非常に大事な位置づけであると私は思っております。幼児期は心の育ちが大切であります。心の教育はマニュアルもなければ、こういう教育をしていけばいいという確かなものはありません。目には見えませんが、それだけになかなか評価しにくいものだと思っております。跳び箱が飛べたり、計算ができたり、漢字が読めたりする目に見えることではなくて、いつも心を大切に、どこに行っても他人に愛される子どもとして成長する。そのためには、感性をいっぱいもって育ち、やさしい心や思いやりをもって、人の痛みに寄り添うことのできる子どもとして成長することを圖の方針として、ずっと続けてまいりました。

だんだんと時代の変化とともに、「叱ってはいけない」、「気がついていても知らぬ顔」というような風潮のなかにどっぷりと浸かっている、私たち大人社会が今あるように思います。子どもを褒めて育てる、ということは素晴らしいことではあります。しかし、間違ったときにしっかりと叱ってくれる人が傍にいないことこそが必要であると思うのです。それは自分の子どもだけではなく、社会に出ている大人であっても理不尽な時は注意を促すようにする。「まあ、いいや」というような気持ちにはならず、自分を振り返りながら、こういう社会にならないためには、今、一人ひとりの思いが集結してこそ新しい時代に生まれ変わると私は思っております。良いことと悪いことをきちんと教えてくれる、あたりまえの風景が今は少しずつなくなっているのかな、とさびしい思いであります。今、園児たちがここで歌わせていただいて涙しておられるお父さんたち、お母さんたちを見ながら、私自身も本当に子どもたちに心を癒され、一生懸命、前向きに頑張れます。その小さな幼児期のなかでしっかりと土台をつくっていくということが、親とは違う私たちの、大人の役割だと思っています。これから時代を担う大人となっていく子どもたちに、私たちに何ができるかということを考えていく必要があります。

自己決定

京都市で「人づくり21世紀委員会」という活動が立ち上がった時に、そのメンバーに加えていただきました。まさしく「人をつくる」取り組みです。それは思春期の中学生の子どもたちを相手に、どんなことをしていけば思春期を豊かに過ごしていけるか、その周りにいる私たち大人がどんなことをしていけば、その子たちの心が癒されるのかなということを考えながら、また生徒たちと向き合って、たくさんの議論を重ねてまいりました。

中学の生徒たちについて議論になった、印象的なことを皆さんにご紹介したいと思います。ある時、10人の生徒が壁に落書きをしていたそうです。その落書きは「死ぬ」とか「うざい」とか、そういう書いてはいけない内容を学校の壁一面に落書きをして楽しんでたというのです。それを先生が見つけて、その子たちを呼んで、いろいろ事情を聞きました。生徒10人のうち3人は落書きをしているのを見ていました。そして7人は思い切り楽しんで、とても明るい表情で、何の屈託もない顔をしていたそうです。そしてそこに居合わせた先生が思いきり叱りました。その2、3日後に私たちが集まりまして議論をいたしました。先ほど申しましたように、叱ること、良いことと悪いことを教えるということ、なんでもそうできるわけではないということが、この議論の割れるところになりました。先生は、3人の保護者も呼んだそうです。その時3人の生徒は「僕はしてなかった」、「ただ、みんながしているのを見ていただけ」と主張したそうです。しかしその先生は「見ているだけでも罪がある」。それを罪と解釈したそうです。「見えていても何をしていても、そこに居合わせていたらそれは同じ、同罪である」と先生は、おっしゃったそうです。

この問題についての議論の際、私の個人的な考えでは少し首を傾げるところがありました。確かにその先生は「見ているだけではだめだ」と、「その人たちを制止し、『やめなさい、そういうことをしてはだめだ』という正義感をもって友だちを注意することが当然である」と、指導されました。しかしながら、いろいろな意見がありまして、その先生を否定はしませんが、私は子どもたちの心に寄り添うということ、つまり出会う大人によって一人ひとり子どもがこれから前を向いていく姿は大きく変化することになり、その先生がどちらの答えが良い、悪いではなく、その時にどれほどその子どもの心に寄り添えたかです。「見ていただけ」の3人が、7人の友だちが落書きをしている時に「おい、やめろ。やめるんだ」という正義感をもって注意できるという勇気は強さがいりますし、むしろ、「いけないな、おかしいな」と思って落書きしなかったことは認めてあげたいということです。しかし、「同罪だ」と言われたその保護者は子どもに非常に注意したそうです。その子どもが正義感を出して止めたとしたら、その子たちの間のグループ意識、コミュニケーション、これから仲間として育っていくなかで果たしてそれだけが正解であったかという疑問であります。

思春期を迎えて子どもたちは、いろいろな葛藤の中で、時間と、空間と、仲間を大切にしています。忙しすぎて時間が足りなくなる大人社会。そのなかに子どもたちが巻き込まれ、仲間という意識がだんだんと希薄化しているなかで、精一杯の仲間意識をもったからこそその子たちがじっとそこにたたずんでいたのだと思います。そして「いやだ」ということは言えた。「お前も書け」「お前もどうや」と誘われた時に「おれはしなかった」という、その勇気を認めてやることが、その子がまた第一歩を進んでいける土台であると考えております。時間と空間と、そして仲間。この「三間」と呼ばれる「間」について、今私たち大人は、ゆっくりと考える時間がなかなかありません。

「自己決定ができること」、「自己責任がとれること」、そして「物事の本質に迫るための知恵に満ちた選択能力を高めること」。この三つが、子どもたちがこれから社会に出ていくために、とても大切な、育んでいかねばならないことだと思っています。幼児期であっても自己決定すること、その年齢なりにできることであります。そして特に私たち大人は今では事なかれ主義で、隣で見ていても「あんなこと、していいのかな」、「あんなこと、言っているのかな」と感じながらも、知らぬふりをして通過していく人たちがいっぱいいる。そのなかで立ち止まり、その人に問いただすのではなくて、「それでよかったかな」という一言だけでも言える勇気があれば、一人ひとりがまた違った生き方ができるのではないかと考えております。

心の豊かさ

高度経済成長下の「豊かさ」というキーワードに代わり、社会全体で追求める価値観や規範、基本軸を私たちがもう一回構築し直していく責任があると私は思っております。そして毎日、園生活のなかで絆をしっかりと深めて、お互いが認め合い、お互いが譲り合い、お互いが注意しあえる、そういう絆をつくっていく。そのためにはどうすればいいか。それは「しなやかに強く」ということだと思います。これはとても難しいことだと思います。弾力的に柔軟に、と言葉は簡単ですが、自分自身がしっかりと芯をもって、ぶれないということです。右の人が言ったことに「そうかもしれないな。その方が私にとっては得かもしれないな。子どもにとってはその方がいいかもしれないな」と思ったり、また左の人が違うことを言えば「そう言えば、こっちの方がいいかもしれないな。その方が私は楽に生きていけるかもしれない」と揺れ動くのはいいのですが、自分自身がいつもぶれないことです。イエスマンというのはやはり人との信頼関係がなくなると思います。良いことは「いいな」と言ってあげる。悪いことは「悪い」と言うのではなくて、「ちょっと考えてみてはいかがですか」「ちょっと振り返ってみたいとうですか」という一言で、その人の対応の仕方は全然変わっていきます。

芯をもってぶれないで生きていくということは、とても大切でありながらしんどいことだと思います。いつもふらふらと、どちらにも寄り添っていると、自分は楽かもしれないけれども、何か壁にぶち当たった時に後ろを振り返ったら誰も助けてくれる人はいない。しっかりと自分の足で歩いていくには、人に頼らず、時には人に頼りながら自分がしっかりと目標をもって生きていくことが必要であると考えています。

合理的、概念的な理解のなかで他人と交わっていくのではなく、お互いに思いやり、譲り合い、そして愛し合う関係づくりを、毎日根気よく丁寧に続けることによって、より良い人間関係がつけられると私は信じております。そしてそれに沿って歩いていくことが、私たちが大人社会でやるべき責任だとも思っています。蹠いた時、泣いた時、「もうどうなってもいいから、もういいや」という最後の一步を踏み込むことではなく、始めの一步を踏み出し、そしてたくさんの仕切り直しをしながら、今、自分には何が正しいのかなか、何が必要なのか、何が大切かという、自分が思っているいい人生であるかどうかを考えることが必要であるかと思えます。いい人生というのは、いつも幸せいっぱいではありません。苦難もあり、そして悲しみもあり、それを乗り越えながら幸せがあると私は思っております。しっかりと自分自身をもって何をするべきかを考えていただく。そして「しなやかに強く」という解釈は、その場に応じて、また問題が起こった時に臨機応変に瞬時に変化できる能力を積んでいくこと。その力が備わっていくことが「しなやかに強く」生きていけることだと思います。

居場所

私はたくさんの人に支えられながら今の自分があると思っております。人と人とが生きられる言葉は心をつないでくれます。「ありがとう」。その一言が、どれだけ人の励ましになるかということです。困っている時にイライラしたり、キレたりするのはなくて、少し時間をおいて自分を振り返りながら、自分の行動はそれでよかったか。そしてこれから前を向いていくためには誰が必要とされているのか。自分の居場所を見つけることなのです。自分の居場所があつてこそ、自分が安定した気持ちで前に向かっていけます。その居場所は大きくなくても、小さな居場所でもいいと思います。皆様方は、それぞれ自分の思いや考えをしっかりともっておられると思います。しかし、先ほど申し上げましたように、蹠いた時に必ず仕切り直しをするということを覚えていただきたいと思えます。一人ひとり大切にされているお子様を預かっている私たちは、大切に思っているからこそ、やさしさや、時には厳しさもあり、そして厳しくできるからこそ、子どもを愛せることもあります。

子どもを叱る、子どもに注意する、保護者の方に注意を促す。それは驕った気持ちではなくて、その人にこうなってほしい、こう歩んでほしいという気持ちがあるからこそ、できることです。それは、厳しさの裏返しに優しさがあるからできるのだと私は思っております。いろいろな情報や知識の言葉は過剰なほど絶え間なく機械的に取り交わされていますけれども、人とかがかわるとき心の通う言葉のやりとりを、お互いに意識していただけたらと思います。そのことによって、一人ひとりの心に寄り添っていただけるのではないのでしょうか。

気力と体力そして人間関係をしっかりと結べる力。つまり相手の立場を尊重し、人に優しい手を差し伸べる言動ができる。これがまさしく「人間力」だと思います。今、教育力を優先しているこの社会のなか同志社幼稚園では「人間力」「教育力」をバランスよく保ちつつ同志社の根幹とも言える良心教育を基軸に、神様に守られ心豊かに成長できるようにと願っています。それぞれ価値観は違っても、どこかでつながる場所は常にあると思います。それを見つかけながら、お互い保護者の間で交わりをもってください。どうぞこれからもいつも変わらない心のつながり、人とのつながり、絶対に変わらないもの、戻りたくなる場所、それを見つけて歩んでいただきたいと思います。

柳の木のように土台がしっかりと美しいしなやかさ。そのしなやかな強さをもって、芯がぶれずに、明日からも歩んでいただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

2013年10月16日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録